

一 次の問いに答えなさい。(二十点)

問 次の熟語と組み立て方がよく似ているものを、ア～オから一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 往復      ② 禁止      ③ 親友  
ア 着席    イ 欠点    ウ 断続    エ 頭痛    オ 解放

問 次の四字熟語を、□にそれぞれ漢字一字を入れて完成させなさい。

- ④ 金□玉条      ⑤ 起死□生      ⑥ 意気□合      ⑦ 同工異□  
⑧ 台風□

問 次の各文にはまちがって使われている漢字が一字あります。解答欄の上に誤字を、下に正しい漢字を答えなさい。

- ⑨ 発表後に質議応答に入る。      ⑩ 彼の成績は賞賛に値する。      ⑪ クラスの委員長に任名する。      ⑫ 流行の病気が家族に写る。

問 次の文章は、手紙を書く際に使われる時候のあいさつです。それぞれ何月のものか、漢数字で答えなさい。

- ⑬ 桃の節句をむかえ、空の色もますます春らしく感じられるこのごろです。  
⑭ 年の瀬もいよいよおしせまってきました。  
⑮ 風薫るさわやかな季節となりました。

問 次の作家と作品の組み合わせの中で、正しいものを二つ選び、解答欄⑯⑰に記号で答えなさい。(順不同)

- ア 宮沢賢治 『小僧の神様』      イ 太宰治 『二十四の瞳』      ウ 重松清 『少年H』      エ 芥川龍之介 『鼻』  
オ 夏目漱石 『伊豆の踊子』      カ 清少納言 『源氏物語』      キ ミヒヤエル・エンデ 『はてしない物語』

問 次の文は三通りの意味にとれる、あいまいな文となっています。⑱～⑳の意味だとはっきり伝わるように、解答欄にある文「兄は、弟と( ) 絵が上手でない。」の空欄部分に五文字程度の適切な語句を入れなさい。

「兄は弟のように絵が上手でない。」

- ⑱ 「弟は絵が上手で兄は下手だ」という意味。  
⑲ 「二人とも絵が上手(もしくは下手)だが、兄より弟の方が上手である」という意味。  
⑳ 「二人とも絵が下手だ」という意味。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(四十五点)

読書をする事、あるいは学問をすることの意味とは何なのだろうか。一般には、これまで知らなかった知識を得ることという答えが返ってきた。だが、読書の〈意味〉、学問の〈意味〉というものを考えたとき、その答えだけでは十分ではないだろうと私は考えている。

読書によって、あるいは学ぶということによって、確かに新しい知識が自分のものとなる。しかし読書や学問をすることの〈意味〉は、<sup>i</sup>端的に言って、自分がそれまで何も知らない存在であったことを初めて知る、そこに〈意味〉があるのだと思う。ある知識を得ることは、そんな知識も持っていなかった〈私〉を新たに発見することなのだ。

私一人の身体のなかに地球15周分の細胞がつまっていると知ること、そんなにすごい存在だったのかと感動することは、そんなことも知らない自分であったということを、改めて知ることからくる感動なのだ。初めから何でも知っていたら、感動などは生まれまい。「知らない存在としての自分を知る」こと、学問はそこから出発する。

自分の知っていることは世界のほんの一部にしかすぎないのだと自覚する、それはすなわち自分という存在の□Aということである。それを自覚しないあいだは、自分が絶対だと思いがちである。自分だけしか見えていない。世界は自分のためにまわっているような錯覚を持つ。

自分は〈まだ〉何も知らない存在なのだと知ることによって、相手と自分との関係も見えてくるだろうし、世界のなかでの自分が存在する

この意味も考えることになるだろう。私は(まだ)何も知らないと自覚することは、いまから世界を見ることができるということでもある。  
①それが学問のモチベーションになり、駆動力になる。

「何も知らない自分」を知らないで、ただ日常を普通に生きていることに満足、充足しているところからは、あえてしんどい作業をともなう学問、研究などへの興味もモチベーションも生まれないのは当然である。しかし、ああ、自分は実は世界のほんのちっぽけな一部しかこれまで見てこなかった、知っていなかったと実感できれば、そして自分がこれまで知らなかった世界がいかに驚異に満ち、知る喜びにあふれていることを、垣間見ることができれば、おのずから知ることに対する敬意、リスペクトの思いにつながるはずである。

こんなちっぽけな私の身体の内には、地球15周分の細胞が詰まっているのだという驚きと感動、その驚きは必ず自分という存在を見る目に変更をせざるはずである。②自分という存在を尊厳の思いともに見ることのできる基盤ができることでもあるが、いっぽうで、このまま何も知らずに人生を漫然と送っていては、こんな喜びに出会えないだけでも大きなソンだろうと思えば、シメタものである。

わが家に小さな子どもがやってきた。まだ一歳にもならない女の子である。③世の中では孫と呼ぶらしいが、それがかわいいのである。見ているといくつも発見がある。自分の子のときには見えていなかったことばかりである。彼女は世界の中心にいる。天動説のようなもので、自分では何もなくても、すべてが彼女のまわりをまわっている。世界を所有し、世界は包んではくれても、\*対峙することはない。

保育園や幼稚園に行くようになって、同じような年齢層の(他者)に初めて出会うことになる。ここで(他者)を知ることが、すなわち自分という存在を意識する最初の経験となるのだろう。世界は自分のためだけにまわっているのではないことを初めて知る。(他者)を知ることによって初めて(自己)というものへの意識が**メ**バえる。「自我のめげえ」は、(他者)によって意識される(自己)への視線である。自分を外から見るといふ経験、これはすなわち学ぶということの最初の経験なのである。

先に述べたように、読書をするということは、「こんなことも知らなかった自分」を発見すること、すなわち自分を客観的にながめることである。(自己)の相対化であると言ってもいい。

こんなことを考えている人がいたのかと思う。こんなひたすらな愛があったのか、こんなつらい別れがあるのかと、小説に涙ぐむ。それらは「読む」という行為の以前には、知らなかった世界ばかりである。それを知るといふことは、すなわち「それを知らなかった自分」を知ることである。一冊の書物を読めば、その分、自分を見る新しい視線が自分のなかに生まれる。(自己)の相対化とはそういうことである。

勉強するのは、そのためである。読書にしても、勉強にしても、それは知識を広げるといふことも確かにその通りだが、もっと大切なことは、自分を客観的にながめるための、新しい場所を獲得するという意味のほうが大きい。小さな子が他者と出会うと初めて自分に気づいたように、私たちは(自己)をいろいろな角度から見るときの、**フクスウ**の視線を得るために、勉強をし、読書をする。それを欠くと、ひとりよりの自分をぬけ出すことができない。(他者)との関係を築くことができない。

勉強や読書は、自分では持ち得ない(他の時間)を持つということでもある。過去の多くの時間に出会うということでもある。④過去の時間を所有する、それもまた、自分だけでは持ちえなかった自分への視線を得ることでもあるだろう。そんな風にして、それぞれの個人は世界と向き合うための基盤を作ってゆく。

「こんなことも知らなかった自分」を知るといふことは、「知への respect (尊敬・敬意)」という点からとても重要である。一つの科学的事実が明らかになるまでに、どれだけ時間がかかり、どれだけの人々の **iii** たゆまぬ努力が要求されたのか。今という時代にあつては、当たりまえとも思えるような事実が、正しいものとして定着するためには、どれほどの時間がかかり、どのような実験や理論構築を経てなされたものなのか、それらを **iv** つぶさに知ることによってのみ、私たちは、通常いともたやすく口にしてしまいがちである。⑤(真理)というものに対する敬意を持つことが可能になる。

(永田和宏『知の体力』新潮新書)

\*注 対峙||対立するものがにらみあって動かないこと。

問一 a  b  c  のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部 i~iv の意味として最も適切なものを、次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- i 「端的に」      ア 手短かに      イ 遠まわしに      ウ 大胆に      エ 冷静に      オ 大げさに
- ii 「垣間見る」      ア 遠くから見る      イ 近づいて見る      ウ ちらっと見る      エ 細かく見る      オ 部分を見る
- iii 「たゆまぬ」      ア 続かない      イ とだえない      ウ 分けへだてない      エ はなれない      オ 落ち着かない
- iv 「つぶさに」      ア くわしく      イ はば広く      ウ おく深く      エ 未永く      オ はっきりと

問三  A  に入る語句を本文中から三字でぬき出しなさい。

問四——線部①の「学問のモチベーション」は、どのようにして形成されるのですか、説明しなさい。

問五——線部②の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分は実は世界のほんのちっぽけな一部しか見てこなかったことを知ると同時に、世界が驚異に満ち、知る喜びにあふれていることを知ったうえで、自分がその世界の一部であることを実感するということ。

イ 自分がまだ世界をまったく知らなかったことに気づき、自分と同じような〈他者〉の存在に出会うことで、〈他者〉のまなざしを獲得し、その客観的な視線の中で「自己」という存在を実感するということ。

ウ 自分は取るに足らない存在であるにもかかわらず、その自分という存在には奇跡とも思えるほどの驚異に満ちた細やかさが内蔵されていることを感じ、それをかけがえないものとして実感するということ。

エ 何も知らない自分という存在に気づくことで、これまで知らなかった世界が驚異に満ちていることを知り、学問や研究に関心がめばえ、知る喜びを知る自分を価値のある存在として認めるということ。

オ 小説一つを読んでも涙ぐむような感受性豊かな自分を発見することで、ただ知識を広げることにとどまらず、自己を客観的にながめる新たな場所を獲得した自分を、価値ある存在として認めるということ。

問六——線部③で、なぜこのような言い方をするのですか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学者としてずっと研究生活を送ってきたことで、世間一般の常識からすっかり遠ざかってしまっているから。

イ 世の中での位置づけにあえて無関心な立場に立つことで、一歳児をかけ値なしで見ようとしているから。

ウ 常識というものにとらわれない自分をことさらに強調することで、自分の世界を見る目を誇示したいから。

エ 一歳児は自分を中心に世界がまわっているように思っていることを、冷やかな視線で指摘しているから。

オ あえてつき放した言い方をするので、孫がかわいくて仕方がないという思いをかくそうとしているから。

問七——線部④は、どういうことですか、説明しなさい。

問八——線部⑤は、どういうことですか、説明しなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(五十五点)

中学二年生の「わたし」(花岡沙弥)は、親の仕事の都合で小学六年生の春から中学二年生の夏までをマレーシアで暮らし、九月から地元中学校へ転校した。「帰国子女」だと目立ちすぎないようにしていたあるとき、中学三年生の図書委員「佐藤先輩」から短歌を詠もつとそわられる。「佐藤先輩」は周囲から「督促女王」と呼ばれる、少し浮いた存在だった。そのことに「わたし」はとまどったものの、短歌を口にした瞬間、心のどこかが自由になった気分を味わい、短歌に興味を持った。けれども、後日「わたし」を、吟行にさそいに来た「佐藤先輩」を見た友達から、彼女との関係について問われたとき、思わず「本当は迷惑だ」と言ってしまう。

そう言った瞬間、我に返った。

言いすぎた。

わたしがあわてて教室を見まわすと、もう佐藤先輩はいなかった。

だいじょうぶ、聞こえてない、よね。

(中略)

放課後、指定された時間に図書室に行くと、どこにも佐藤先輩の姿はなかった。

待ってみるけれど、三時四十五分になっても、四時になっても <sup>a</sup>アラワれない。

「あの、督そ……、佐藤先輩どこにいるか知りませんか？」

カウンターでパソコンに向かっていた司書の七海さんにきいてみた。

「さあ……今日は見てないね。明日の昼休みは図書委員の当番で来るけど、三年A組の教室のぞいてみたら？」

ああ分かりました、と答えたものの、ちょっと <sup>i</sup>気が引けた。上の学年のクラスをのぞくのってすごく勇気がある。

図書館から出て、教室のとびらにはまっている窓から佐藤先輩の姿をさがした。

いない。数人が窓際に集まって何かしゃべっているだけだった。

残念、かも。

わたしはいつの間にか吟行を楽しみにしていたみたいだ。

b ヨクジツの昼休み、佐藤先輩は図書室の書架しよかの整頓せいとんをしていた。

「昨日、吟行するんじゃないですか？」

わたし、待つてたんですけど、ということアビールするように、<sup>①</sup>わたしは少し口をとがらせた。「もう行かないよ。」

「え？」

「花岡さんと吟行はしない。」

佐藤先輩はわたしのほうを見ず、本の背ラベルに目を向けたまま言った。

「わたしといるところを見られるの、いやなんでしょ？」

<sup>②</sup> ああ。

昨日の給食の時間、自分の口から飛び出た言葉を思い出す。

『無理やり連れていかれるだけなんだよ。ほんととは迷惑！』

あの言葉が聞こえていたなんて……。

わたし、サイテーだ。

「ごめんなさい。あの……。」

ちがうんです、と言おうとしたけれど、言えなかった。

何も、ちがわないじゃないか。

下級生からも変わり者あつかいされている佐藤先輩と、仲よくしていることを周りに知られるのがいやだった。

わたしまで変わり者の\*カテゴリーに入ってしまうと思ったから。

なのに、二人でいるときは仲よくしたいなんて、<sup>ii</sup>虫がいい。

佐藤先輩の気持ちなんて考えていなかった。

「わたし、周りから自分がどう呼ばれてるかなんて知ってるよ。いばって督促状を持ってくるから、督促女王。どの教室も、わたしが入っていくといやそうな顔をする。」

「わたしは……。」

「いいよ、自分の身を守りなよ。わたしとちがって、中学生活まだまだ続くんだから。居心地いこちいい寢床ねじは必要だよ。」

<sup>③</sup> 佐藤先輩はくちびるだけでほほえんでいた。こわいと思った。だってそれは、本当の笑顔えがおじゃないと分かったから。

昼休みだけじゃない、何かもっと大事なものの終わりのような\*予鈴よれいが鳴る。

「それじゃあ。」

佐藤先輩はわたしの横をすりぬけた。

「じゃあ七海さん、もどりますね。」

「おつかれさま。今日はもう一人の当番はつとちの服部はつとちさん来なかったわねえ。」

「来週はサボらないように言っておきます。」

佐藤先輩と七海さんのやり取りが耳に<sup>c</sup>下くだどく。

わたしも教室にもどらなくちゃ。でも、動けない。

そのとき、本棚ほんだなに並んでいる一冊が目に留まった。

何だかなつかしさが胸に広がって、それがマレーシアの日本人学校の図書室で読んだ小説だと少しおくれて気がついた。その本を見つめると、

「あら、花岡さん。もう本鈴ほんれい鳴るよ。教室もどって……ていうか、どうしたの？」

七海さんに声をかけられた。

「あ、えと、その。これ借りたくて。」

わたしはとっさにごまかし、人さし指をかけて本棚からその本をぬき出した。

この本を胸にかかえて目を閉じたら、マレーシアの日本人学校の図書室にワープできればいいのに。そんなファンタジーの世界のようなことを考えたら、なみだが出てきた。

「この本、マレーシアで通った学校の図書室にもあったんです。わたし……マレーシアに帰りたい。」  
わたしは日本に帰ってきてから、周りの目ばかりを気にしている。

どうして。どうして。

わたしはくやしかった。

飛行機で運ばれる間に、自分の性格が変わってしまったような気がする。

マレーシアはいろんな民族がごっちゃに暮らしている多民族国家だ。

わたしは、マレーシアには東南アジア系の顔の人たちだけが住んでいると思っていた。でも、そうじゃなかった。電車に乗っても、一つの車両にいろんな人たちがいた。

トウドウンと呼ばれるボールをかぶったイスラム教徒の女性たち。そのトウドウンはカラフルで、数人で身を寄せている後ろ姿は、きれいな羽の鳥たちみたいに見えた。

その前でおしゃべりしているのは、わたしたちとよく似た中華系の人たち。(でも、髪型や服のセンスとか、どこか日本人とちがう。) ドアに寄りかかっているのは、目の(A)したインド系のお兄さんたち。

マレーシア語も、英語も、どこの国か分からない言葉も混ぜこぜで聞こえてきた。

そんな車内から、窓の外の景色以上に目にはなせなかった。

④ダブンカ、なんていう言葉はまだよく知らなかった。でも、一つハッキリ言えることは、わたしの気分がかなり上がったということ。

すごい、すごい、すごい。

暮らし始めると何を見ても新鮮で、サイダーのあわみみたいな刺激があった。

とびらを完全に閉じる前に走りだしちゃうバス。

舗装がポツコボコのアスファルト。

屋台で売られているカエル肉の料理。

鼻にパンチを食らわすドリアンが山積みになった出店。

バスバツサと葉がおいしげるヤシの木たち。

大自然と都会がとなり合わせにあつて、街の中心にはペトロナスツインタワーと呼ばれるトウモロコシみたいな形のビルがそびえ立つ。

蜘蛛の巣みたいな大きなヒビを窓ガラスに入れたまま走っている電車もあったっけ。

解放感、というのかな。

ここに来ることができてすぐラッキーだと思った。

みんなで同じものを持たなくちゃ、同じようなタイムで走らなきゃ、同じものをおいしいと思わなきゃ。

マレーシアに来る前のわたしはそんな思いにとらわれていた。それは四年生の後半あたりからわたしの胸に蜘蛛の巣のようにはりついていた。

でもここは、人とちがっていても仲間ハズレにされちゃうような場所じゃない。マレーシアで、わたしたち兄妹が入った日本人学校もそうだった。

インターナショナルスクールってガラじゃないよね、とか言ってお父さんとお母さんが決めた学校だったけれど、学年のへだてはなくて自由だった。一つ二つの年の差なんて気にせず、よくいっしょに遊んでいた。

なのに、今のわたしときたら。

人とちがうことをこわがって、人とちがうことを否定して。

こんな自分、いやだ。

⑤花岡さん。」

とん、とん。七海さんは横からわたしの背中をやさしくたたき、

「その本、私も好きだよ。」

(B) した口調で言った。

「私が中学生のころに発行された本なの。主人公の女の子に、自分を重ねて読んでた。」

わたしは(C)と七海さんの顔を見る。

大人の人の年齢がよく分からないけど、七海さんはまだお姉さんって呼べるくらいには若い。白いはだには少しソバカスがあつて、赤い

フレームの眼鏡のおく目がどんぐりみたいに丸くて茶色い。

それでも、この人が中学生のころって、きつと十年以上前の話だ。

「私は、昔から本が好きだったから、休みの日は一日中、自転車で乗って図書館めぐりしてたの。たいていの図書館にその本は置いてあった。それがすごく心のよりどころになった。いやなことや悲しいことがあって自分の心がグラグラになっても、その本は私が行く先々で、どこでも同じ凛とした姿で図書館にある。それを見ると、安心して、私も自分の気持ちを立て直すことができたの。」

マレーシアの日本人学校の図書室にも、この中学校の図書室にも。遠くはなれた場所でも、この本は変わらない……。

そういえば、マレーシアの日本人学校に ヘンニユウ したばかりのころ、日本でよく読んでいた本が図書室にそろっていて、何だかほっとしたつけ。

今はその逆だなんて笑ってしまう。

「佐藤さんね、へんにゆうしてきたあなたのことを気にしてたよ。佐藤さんも転校生だったから、花岡さんの心配や緊張をやわらげようとして、それで吟行にさそったんじゃないかな。ただ、不器用だから、あんな命令口調になってたけど、花岡さんと仲よくなりましたって話だと思っうよ。」

わたしと仲よくなるうと……？

もし、それが本当だったら。単に\*出席番号が三十一だからだけじゃないとしたら……。

わたしはひどいことを言ってしまった。

そう思ったとき、本鈴が鳴った。

「教室にもどれそう？」

わたしはうなずいた。

教室にもどる途中、ほこりの転がる廊下を急ぎ足で進みながら考える。

佐藤先輩に謝らなきゃ。

どうにか、仲直りをする方法……。

気持ちを伝えるにはどうすればいい？

月曜日の朝、わたしは三年A組の後ろのとびらを（D）と開けた。

佐藤先輩の目印はつややかなロングヘア。教卓の目の前の席で本を開いているのが、すぐ目に入った。

⑥ 失礼します！

思った以上に大きな声が出て、教室にいる人たちの視線がわたしに集まる。

こわくない、こわくない。わたしは自分に言い聞かせ、（E）と目指す席まで進んだ。佐藤先輩はふり返らないままだ。

「あの、これ！」

わたしは\*タンカードをわたした。

「何？」

「この間の続きを見てみてください。わたしの短歌が書いてあります。」

それだけ言うと、佐藤先輩の言葉を待たずに、教室を出た。

⑦ わたしの伝えたいことは、あの短歌にたくしてあるから。

『\*ジャランジャラン 願いをこめてもう一度いっしょに歩いてみたい道です』

伝わりますように。

（こまつあやこ）『リマ・トウジュ・リマ・トウジュ・リマ・トウジュ』講談社

\*注 吟行＝短歌などをつくるために、外に出かけること。

カテゴリー＝同じ部類のこと。

予鈴＝授業の開始を知らせる「本鈴」の前に、もうすぐ始まることを意識させるために鳴らされるチャイムのこと。

出席番号が三十一だから＝「佐藤先輩」は、「わたし」の出席番号が短歌の首の数（三十一音）と同じだから吟行にさそったと話していた。

タンカード＝自分のつくった短歌を書きとめておくカード。

ジャランジャラン＝マレーシア語で「散歩」を意味する言葉。

問一  a  e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (A) (E) に入る最も適切な言葉を次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ言葉を二度以上使ってはけません。

ア ずんずん イ ほんわか ウ そろり エ ふんわり オ まじまし カ ぱっちり

問三 — 線部 i・ii の意味として最も適切なものを、次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

i 「気が引ける」      ア ゆうつになる      イ 興味をもつ      ウ 不愉快になる      エ おじけづく      オ やきもきする  
ii 「虫がいい」      ア ふてぶてしい      イ 自分勝手だ      ウ 氣立てがいい      エ ひとりよがりだ      オ 氣にくわない

問四 — 線部①で、なぜ「わたし」は「口をとがらせた」のですか、その理由を説明しなさい。

問五 — 線部②のときの「わたし」の気持ちを説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「佐藤先輩」に対する「わたし」の本音を聞かれてしまい、知られたのなら仕方ないと開き直ると同時にあきらめを覚えている。

イ 決して聞かれなくなかった、「佐藤先輩」に対する本音を、実は彼女が聞いていたと分かり、その事実絶望を感じている。

ウ 「わたし」が必死にかくしていた本音を「佐藤先輩」がはっきり言い当て、彼女のそのするどさにおどろき、感心している。

エ 「佐藤先輩」に「わたし」の本音が知られてしまったせいで、楽しみにしていた吟行ができなくなると悲嘆にくれている。

オ 「佐藤先輩」に対する本音をかくして「いい子」であり続けることができなくなり、そんな「わたし」自身を嫌悪している。

問六 — 線部③のときの「佐藤先輩」の気持ちを説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「わたし」が、他の人たちと同じように短歌をきらっていたのに、自分のために本心をかくしていたと知り、うらぎられた気持ちでいっぱいになったものの、その悲しみやさみしさを決して出さないようにしている。

イ 「わたし」が、自分のことをいやがっていると知り、うそをついてまで本音をかくしていたことにはいかりを感じたが、そうせざるをえなかった「わたし」の立場を理解し、その姿勢を心の底から応援しようとしている。

ウ 「わたし」が、かげで自分についての悪口を言っていたことを知り、信じていた人にうらぎられたいかりと悲しみを感じたが、自分も「わたし」もこれ以上傷つかないために、落ち着いたふるまいをしようとしている。

エ 「わたし」が、自分の悪口を言っていたと知り、つらく思う気持ちでいっぱいになったものの、その中で、あえて相手の立場を考え、言葉を口に出すことで、自分が理想とする「大人」になりきろうとしている。

オ 「わたし」が、自分をきらっていることを知って、さみしくて孤独な気持ちになっているが、たとえ自分をきらったとしても、「わたし」が短歌を好きになってくれればいいという思いを、相手に伝えようとしている。

問七 — 線部④とありますが、マレーシアにいたときの「わたし」はどんな気持ちでしたのですか、説明しなさい。

問八 — 線部⑤で、「七海さん」はどんな思いを伝えようと「わたし」に声をかけていますか、説明しなさい。

問九 — 線部⑥からうかがえる「わたし」の様子を説明したものととして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 上級生の教室には入りづらいが、「佐藤先輩」に短歌をやりたいという自分の思いを伝えるために勇気をふりしぼっている。

イ 謝ったときに「佐藤先輩」に「ごまかれるかもしれないと不安に思う気持ちを、大きな声を出すことでかき消そうとしている。

ウ あらたまつて「佐藤先輩」に謝るのは恥ずかしいという気持ちをふりはらい、素直になろうと自分をふるい立たせている。

エ 「わたし」に対して「佐藤先輩」が冷たい反応をしても、言いたいことだけは勢いよくぶつけてやろうと意気こんでいる。

オ 上級生からどんな風に見られようとも、「佐藤先輩」といっしょに短歌がしたいという強い気持ちを必死に伝えようとしている。

問十 — 線部⑦の、「わたしの伝えたいこと」の内容について、生徒AとCが次のように会話をしました。会話文を読み、後の問(1)～(3)に答えなさい。

先生 みんな、だいたいお話の内容は分かったよね。では、それぞれの班で最後の短歌について考えてみましょう。

生徒A この短歌には、「わたし」の気持ちがいめられているのよね。

生徒B ちょっと待って。気持ちを伝えるなら手紙でもいいんじゃないのかな。そもそも、どうして短歌にしたのかな。

生徒C リズムに乗せることで、気持ちを伝わりやすくしたのかもしれないね。もちろん、 I という理由もあったと思うよ。

生徒B そうか、それだったら納得だよ。ところで、「いっしょに歩いてみたい道」って何のことだろう。

生徒A ええっと…。その言葉の前にある「ジャランジャラン」は、マレーシア語で「散歩」という意味よね。「佐藤先輩」と「わたし」が散歩している場面なんてあったかしら。

生徒B 散歩なんてしていたかな…そうか、ここでの「散歩」って、吟行のことを指すんだよ！

生徒C ぼくもそう思う。だけど、なんで「ジャランジャラン」ってマレーシア語の言葉をわざと使ったんだろう。

生徒B きつとただの思いつきだよ。

生徒C ええーそんなわけないよ。先生はどう思いますか？

先生 Bくん、それぞれの言葉は、ちゃんと意味があって使われているのよ。みんなもお話の内容を思い出してね。マレーシアで暮らしたことは、「わたし」にとって、かけがえのない経験だったのよ。だから、マレーシア語を使ったんだと思うわ。さて、Aさんはどう思うかな？

生徒A うーん：「ジャランジャラン」って言葉、なんだか日本語のようにも聞こえるんです。Cくん、これは考えるヒントになるかしら。

生徒C 「願いをこめて」と、そのあとに続くんだよね。分かった、あの音だ！

生徒B え、分かったの？

生徒A 私も分かったわ。これはきつと **II** のことを言っているんでしょう。

生徒B なるほど。だからこの短歌のあとに「伝わりますように。」と書かれているんだね。

生徒C 「ジャランジャラン」は、マレーシアで「散歩」を意味するだけじゃなく、日本でよく見られる光景を連想させるためにも用いられているんだね。すごいなあ。

生徒A つまり、この短歌には、「わたし」の **III** という気持ちと、そんな「わたし」の気持ちが「佐藤先輩」に伝わってほしいという気持ちもこめられているのかな。

生徒B 先生、「わたし」の気持ちは、「佐藤先輩」に伝わったんでしょうか。

先生 きつと伝わったと思いますよ。こんなに素敵な短歌なんだから。次の授業では、この続きを読んでいきましょう。

(1) **I** に入る、「わたし」が短歌で気持ちを伝えようとしたもう一つの理由を三十字以内で説明しなさい。

(2) **II** に入る、ある音に関する説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校で生徒に時間を知らせるチャイムの音

イ 砂利がしかれた道を歩くときの足元の音

ウ くじで当たりを引いたときの鐘かねの音

エ トナカイが引くサンタクロースのそりの音

オ 神社にやってきた人々が鳴らす鈴すずの音

(3) **III** に入る、「わたし」の気持ちを二十字以内で答えなさい。



国語 解答用紙 (その一)

得点

受験番号	
------	--

一

②⑩	①⑨	④	①
兄は、弟と (絵が上手でない。	兄は、弟と (絵が上手でない。	兄は、弟と (絵が上手でない。	
月	月	月	月
①⑥	②⑤	③	⑦
⑧	④	⑥	⑧
⑩	⑦	⑤	⑨
⑫	⑧	⑥	⑩
⑭	⑨	⑤	⑪
⑮	⑩	⑥	⑫
⑰	⑪	⑦	⑬
⑱	⑫	⑧	⑭
⑳	⑬	⑨	⑮

二

a
b
c

問二

i
ii
iii
iv

問三


問四


問五

--

問六

--

問七


問八


国語 解答用紙 (その二)

三

問一

d	a
e	b
	c

問二

A
B
C
D
E

問三

i
ii

問四


問五

--

問六

--

問七


問八


問九

--

問十

(3)	(2)	(1)

受験番号	
------	--